

タイトル	異文化接触による相互の意識変容に関する研究：留学生・日本人学生の協働的活動がもたらす双方向的効果
著者	神谷，順子；中川，かず子
引用	北海学園大学学園論集，134：1-17
発行日	2007-12-00

異文化接触による相互の意識変容に関する研究

——留学生・日本人学生の協働的活動がもたらす双方向的効果——

神谷順子
中川かず子

はじめに

現在、日本では117,927人の留学生が様々な分野で勉学、研究をしている^(註1)。留学生受け入れが本格化してきた1980年代は、学位取得、研究交流が留学目的の中心であったが、現在では日本への関心が経済発展、高度な科学技術からアニメ、漫画など日本大衆文化へと広がりを見せ、留学目的も多様化している。また、卒業後、日本の企業に就職を希望する留学生が増え、日本社会においても留学生を新たなリソースとして活用する動きがここ数年顕著に見られるようになった。大学や地域社会では、留学生を一次的な滞在者としてではなく、共同体の一員として考えるようになり、留学生を交えた地域活動が日常的に行われている。このことは、日本社会にとっては留学生を通して異文化接触の機会が与えられ、様々な分野で多文化化してきているといえよう。

留学生交流が大学から地域社会へと広がりを見せてきた背景には、1983年の「留学生10万人推進計画」の政策とともに、1997年には留学生政策の基本方針を「知的国際貢献」と位置付け、日本と諸外国との交流の深化を図るなど国際化に力を入れ始めたこともその一因となっている。その具体策としては「官民一体となった留学生支援」「大学の質的充実のための改革」などがあげられ、自治体、ボランティアグループ、諸国際交流団体が積極的に留学生交流を行うようになった。

大学でも留学生施策を整備し、留学生の文化的リソースを活用し魅力ある大学変革をしようという取り組みが始められた。この結果、多くの大学では様々な留学生交流、国際交流が実施され、日本人学生・留学生との接触交流が盛んになってきた。

これまでの留学生交流では、留学生への学習・生活支援が交流の中心であったのが、留学生と日本人学生の協同による活動がみられるようになった。学問分野から日常生活場面にいたるまで知的パートナーとしての認識が双方に芽生えてきたのである。所謂、協働的活動がなされるようになり、その事例が報告されている。協働的活動では、日本人学生・留学生が親密な関係を築きながら活動を展開していくので、異文化間コミュニケーション、対人関係形成などが問題となり、諸場面で「文化的学び」を経験することになる。

接触の質的深度を問題にした倉地(1998)は、どのような接触をしたかで文化的葛藤もその後の対処、理解も違ってくるという。箕浦(1996)は、異文化接触は認知、情動、行動の側面に影

響をあたえるが、アイデンティティ形成後の成人にとっては、情動レベルまでは影響を及ぼすことが難しいと述べている。

では、自国文化でアイデンティティを形成したとみられる留学生と日本人学生は諸活動を通してどのように影響を及ぼしあっているのだろうか。活動の相互作用過程では、意識するしないにかかわらず文化的学習がなされており、その影響（変容）は相乗効果となって双方に現れてくるであろう。

本研究では、留学生・日本人学生が協働的活動を通して双方にどのような影響を与えているのかを検討するものである。本稿で取り上げる協働的活動とは、留学生・日本人学生が対等な立場で、対人関係を構築しながら課題を遂行していく活動である。その活動過程では、相互の文化的リソースを提供しながら、葛藤、対処、相互理解のプロセスを経験することになるであろう。協働的活動の内容と進展を分析し、その過程に見られる葛藤、対処方略、活動を通して得た「学び」を具体的な出来事を通して捉えていくことは、今後の留学生交流、異文化交流を考える上での新たな視点となるであろう。

本研究は、調査Ⅰ、調査Ⅱにより研究目的を明らかにしていく。調査Ⅰでは活動の観察、参加者へのインタビュー、活動の記述記録から得た資料を整理し、分析検討を行う。

調査Ⅱでは、異文化接触経験が留学生・日本人学生のどの側面にどの程度現れているのかを捉えるために、教育、対人関係、コミュニケーション方略について実際にとっている行動を調べるための質問紙調査を行う。本調査に用いた調査内容は ホフステード (Hofstede, 1985) の価値観概念を援用し、学生達が実際に会える大学教育場面、日常生活場面を設定して質問項目を作成したもので、既に2000年、2002年に用いており、その信頼度が得られている (関・神谷・中川2000, 2002)。まず、日本における異文化接触研究についてみていきたい。

1 日本における留学生異文化接触研究の動向

日本における留学生の異文化接触研究として岩男・萩原 (1988) の留学生の日本社会に対するイメージの研究がその草分け的なものといえる。そこでは、出身国、滞在年数、専門分野など属性による違いを報告している。縦断的な研究により滞在年数が増えることがイメージをよくするとは限らないことが明らかにされ、留学生の対人関係を中心に諸要因が連関していることが示された。その後、「留学生の日本文化への適応」が研究の中心となり、日本文化のどの側面が不適応をおこしているのかなど適応、不適応要因の分析が中心になっていた。不適応要因がホスト文化に関わるもの、特に日本人との対人関係形成にあることも多くの研究で報告されている (上原1992)。日本への適応を促進させる要因としてのサポートネットワークの形成も重要であるという (田中2000, 水野2003, 横田1998)。また、日本人学生との親密な関係形成に関する横田 (1991) の研究、文化変容ストレスを異文化接触の深度を問題にした倉地 (1998) の研究がある。横田は、大学内で留学生と日本人学生が親密な関係形成を阻む要因として、留学生からは「言葉の壁」「日

本的習慣」「対人関係形成への違い」が挙げられ、日本人からは「暗黙のルールが通用しないことへの不安」「無関心」などが挙げられた。倉地は、ジャーナルアプローチを研究にとり入れ個人の内省を分析している。これらの研究結果は、留学生と日本人特に日本人学生との接触が問題になり、留学生が日本社会の閉鎖性、社会からの孤立感を持っていることが報告されている。留学生の側面、日本人の側面からも双方の希薄な関係が問題となっている。

一方、異文化接触の効果として星野（1992）は、文化的葛藤を経ながらも「複眼的な見方」「対処能力」「コミュニケーション能力」などをもたらすものと述べている。加賀美（2007）は留学生の異文化間葛藤と解決方略には価値観が背景にあるとの研究報告をしている。さらに、中川・神谷（2000）、加賀美（2007）ほかの研究において、日本人学生にとって留学生と接触経験の有無が学業、生活面における積極性を促す要因になっていることが報告されている。

日本人学生・留学生との異文化接触が双方にどのような「変容」をもたらすかについての研究（神谷・中川・関，2002）では、留学生と積極的に異文化交流をした学生には、「明確なコミュニケーションスタイル」「対人関係」「社会的活動への積極性」が見られ、大学教育への適応にも高いポイントが得られた。特に、教師と適度な対人関係形成を築き、大学の学業の進捗状況に影響を与えているという結果を報告している。

留学生と日本人学生との交流が活発になってきた現在、その活動を通して日本人学生、留学生がどのように影響を及ぼし合っているのか、又日本社会にどのような変化をもたらしたかに関する研究も報告されている（神谷・中川 2002、加賀美 1999、箕浦 1998、横田 1998）。

日本人学生、留学生の接触交流の影響（効果）を捉えるためには、双方がどのような活動を通して対人関係を築いているのか、活動の質が問題になる。活動過程の諸相にみられる葛藤場面、対処方略、合意形成に至るまでの心的変化を具体的に見ていくことが必要であろう。また、活動を生み出していく背景要因についても捉えることが大切であると考えられる。

2 研究目的と方法

本研究は、留学生と日本人学生との協働的活動の事例に注目し、活動過程と活動の実践者である日本人学生と留学生の相互作用による相互の「変容」を捉えることを目的とする。相互の「変容」としては、葛藤場面、対処方略、相互理解、学びを分析の視点とする。本研究の事例として取り上げた活動は、札幌市のH大学の日本人学生サークル活動（以下、「異文化サークル」とよぶ）と留学生会の協働的活動である。日本人学生と留学生がどのような過程を経て協働で課題に取り組むのか、その活動の進展と参加者の心的変化を捉え、文化的影響がどの側面に現れるかを検討する。

この研究課題のために次の2調査を行い、その結果を総合し、分析考察を行う。

2-1 調査の概要

調査Ⅰ：大学での日本人学生と留学生の協働的活動の進展を観察し、活動のリーダーと参加者に対しインタビューを行った。

調査対象者：日本人学生 8名（異文化サークルのリーダー）

留学生 8名（留学生会のリーダー）

インタビュー内容は 葛藤場面とその時の気持ち、その対処方法、相互理解に必要なこと、活動からの学び、自分が影響を受けた人、について自由記述により回答してもらい、その後、面接を行った。さらに、記述記録（活動報告書）も分析資料として用いた。

調査Ⅱ：日本人学生と留学生への価値観及び実際行動に関する質問紙調査

調査対象：札幌市の私立大学の日本人学生 135名 留学生 75名（国籍：中国，韓国）

調査時期：2006年9月 実施方法：大学での授業終了後に配布し、回収した。

調査内容：大学の教育場面における対人関係，コミュニケーションスタイル，ライフスタイルに関する価値観及び実際の行動についての質問紙調査を行った。この質問紙調査に用いた項目は，ホフステードの価値観を援用し^(註2)，大学生・留学生の価値観，実際行動を調べるために作成したものである。既に2002年の調査で用いており，その信頼性，妥当性が得られている。本研究では，この調査内容のうち，実際行動についてのみ分析考察に用いる。異文化接触経験が各人の実際行動にどう現れているかを捉えるため，交流活動経験の有無，協働的活動の実践者及びリーダー群に分け，日本人学生・留学生各群の特徴を捉えた。ホフステードは価値思考を「ある状況で自分が好ましいと感じること」と定義している（Hofstede, 1985）。しかし，ホフステードも指摘しているように，価値観とは誰でもわかる明示的なものではなく，むしろ実際にどのような行動をしているかのほうがより正確に捉えることができる。

質問紙内容は，学生が大学生活で経験する状況，場面を設定し，そこでとる実際行動を捉えるための質問項目を設定した。回答方法は，各項目に対し，5段階評定（1全くしていない～5完全にしている）で求めた。

2-2 異文化接触からみた協働的活動の意味

本研究では，日本人学生と留学生との協働的活動を「双方が対等な立場で信頼関係を構築し，協働で課題遂行していくことをめざす活動」と定義する。多くの研究で報告されているように，マイノリティーである留学生は周辺的な存在であり，存在そのものがサポートの対象ではあったが，大学コミュニティにおいて中心的な地位をとり，活動することが極めてまれであった。江渕（1991）が指摘するように，本来留学生と日本人学生は大学生活でパートナーとして高め合う存在であるにも拘らず，留学生は単に支援の対象としてしかみられない，所謂ハンディキャップ論が主流になっていた。留学生へのサポートは必要ではあるが，サポート中心の交流であれば，関係

が一方向だけとなり、「相互交流」にはなりえない。

ではどのような交流がパートナーシップを形成することができるのであろうか。多くの先行研究で報告されているように、関係が「互恵」であるときに始めて真のパートナーシップが形成される。「互恵」的關係を築くためには、双方が対等であることが必要である。

協働的活動では、活動の参加者（日本人、留学生）が対等な立場にたって、活動を企画していく。活動の企画者は、自由にアイデアを出し合い、議論を重ね、活動を実践していく。その過程においては極めて互恵的關係が形成されることが予想される。

留学生と日本人学生の協働的活動の始まりには、「出会い」の機会がある。大学では学校行事の新入生歓迎コンパ、チューターの援助、授業、サークル活動などが出会いの機会となり、双方にとって異文化接触の開始を意味する。その後、個人間又は集団による対人関係が構築され、活動が進展していく。この活動の進展には、一つの活動が次の活動を生み出す「足場づくり」の役割を果たしている。双方の活動の目標が日本人学生・留学生と相互扶助、相互交流を掲げているということは、「互恵關係」を築く活動を生み出すことを示唆している。双方が共通の目標に向かい、協働で課題を遂行していくこと、活動の連鎖により高次の活動を作り出すことが協働の意味であると考えられる。

2-3 協働的活動における葛藤、対処方略、相互理解の視点

異文化接触をベリー（Berry et al, 1992）は、ホスト文化をどう取り入れるかで4タイプのモデルを提示した。接触過程は接触開始、葛藤を経て、危機的状況から境界化即ち、同化、統合、離脱に分類している。対処方略によりどの方向をとるかを決定すると考えられる。統合は、活動過程に見られる相互理解、学びを意味する。

異文化接触を渡辺（1995）は、ある程度の文化を経た人が、他の文化集団やその成員ともつ相互作用と定義し、斎藤（1993）は文化的背景を異にする人々の間でなされる対面的相互作用を異文化間接触と定義している。本稿で用いる異文化接触には文化と文化の「間」で起こる問題に注目するという意味において、異文化間接触の概念も含まれている。

では、その過程で起る葛藤をどう捉えていくべきなのだろうか。異文化接触で経験する葛藤については、ホスト文化における行動規範やコミュニケーション方略、状況の認知ができないために生じる困難が認知、行動、情動の側面であらわれてくると考えられる。

異文化間におけるコミュニケーション方略の違いから生じる葛藤を考えると、E.ホールの高文脈と低文脈分類によれば、文脈依存の高い文化（日本）は、言語使用に頼らずに互いに理解可能との認識で、婉曲表現、間接的なコミュニケーションスタイルをとる傾向がある。明瞭な言語表現使用の低文脈文化圏の人にとっては葛藤場面となるであろう。葛藤への対処方略では、ホフステードの価値思考からみると、個人主義的な価値思考の社会では、積極的、直接的な方略をとるが、集団主義的な社会では、間接的で、周囲に合わせる方略をとるであろう。意見が対立し

た場合、直接対立を避けるか積極的に自己主張をするかその程度の差はあるものの行動に現れる。

本研究では、異文化接触特に協働的活動の経験が葛藤、対処方略、相互理解において、行動と意識の面にどうあらわれてくるのかを面接、記述資料、質問紙調査にて検討していく。

3 調査Ⅰの結果及び考察

3-1 協働的活動の事例分析

本章では、札幌市にあるH私立大学のサークル活動と留学生会とにみられる協働的活動の内容と実践者同士の異文化接触による葛藤場面と事柄、その対処、相互理解又は離反への過程を捉えていく。H大学異文化サークルは、留学生との異文化交流活動や様々な文化を学びながら、自分達の「文化」を送発信しようと言う活動である。また、留学生との活動では、学習・生活支援をはじめ留学生活に対するサポーターとしての役割も果たしている。一方、留学生会は、留学生間での情報交換、相互扶助・相互学習を目的にすると同時に、学内外に向けて文化発信をする目的も担っている。

図1は、この2つのグループがどのように出会い、交流を深めながら、協働的活動を展開しているのかを示したものである。具体的な活動内容とそこでなされる相互作用、どのように信頼関係、互恵的関係を構築していくかを1年間の動きを俯瞰し、分析していく。

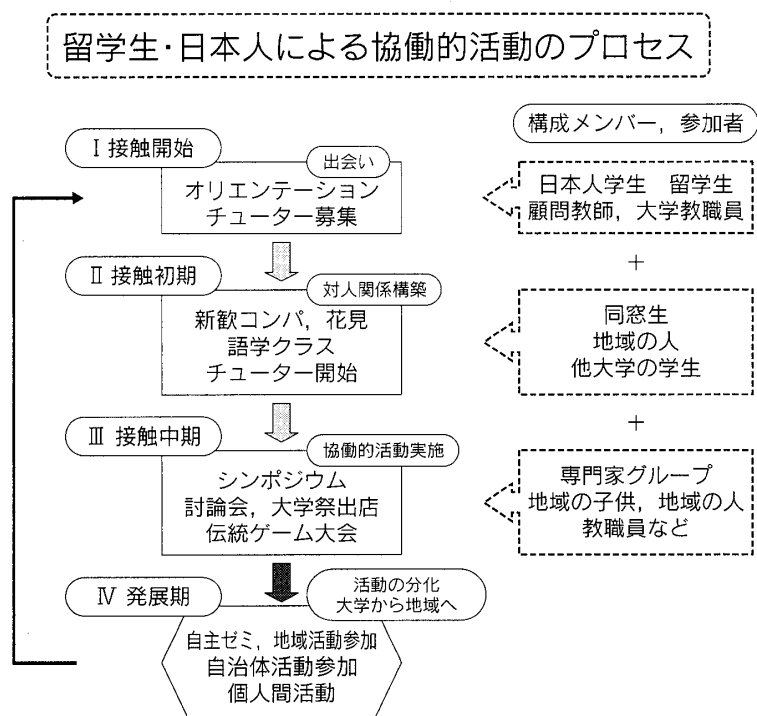


図1 協働的活動の段階的進展と活動の参加者

I 接触開始 ― 日本人学生と留学生との出会い

留学生のための新入生オリエンテーション：大学における勉強の目的と意義，大学生生活の実際の様子，大学生生活で起るであろう異文化適応に関する知識など，学業面と生活面を支える心理的問題について大学教員から講義及び先輩留学生・異文化サークルの学生からアドバイスを受ける。

キャンパスツアー：日本人学生・先輩留学生によるキャンパスツアーが実施され，大学施設案内，大学教育を受けるために必要な事柄の具体的に説明をうける。

チューターとの出会い：各留学生に対し，学業面，生活面での協力者としてのチューターが決まり，チューターとどのように活動していくかが話し合われる。このチューターには，異文化サークルのメンバーから応募者を募り，決定する。チューターとしての役割は，大学生生活の諸問題とそれへの対処方法，日常生活の情報提供などが中心であり，個人間での対人関係を作っていく。チューターから友人関係に移行するもの，単なる問題解決への相談相手となるものなど様々である。

II 接触初期 ― 文化的差異の気付き，葛藤が始まる

新入生歓迎コンパ：新入生のための新入生歓迎コンパが日本人学生と留学生合同で行われる。これは留学生会・異文化サークルとが共同で行うもので，留学生に関係する教職員も参加し，留学生，日本人学生との出会いの**公式の場**となる。留学生にとっては日本的パーティ「飲み会」を経験する事になり，お酒が仲間づくり，自己開示に重要な役割を果たすことを学ぶ。日本人学生にとっては，留学生との付き合い方，コミュニケーションのとり方等を学ぶ機会となる。

花見：毎年恒例の行事である。日本人学生と留学生が友人関係を築くきっかけとなる。この行事は，準備から留学生会と異文化サークルが協同で行う。徹夜の「花見席の場所とり」や野外のジンギスカン，歌と踊りなど，この「花見」行事により，双方が北海道の地方文化を共有することとなる。この活動で学生同士の自己開示，同朋意識が芽生え，今後の活動への基礎づくりとなる。

年次活動計画会議：留学生会・異文化サークル合同会議において年次計画が話し合われる。双方初めての**会議場面**である。この場面でのコミュニケーション活動には，会議の運営方法，ディスカッションの仕方，仕事，役割分担の考え方など，双方がどう対応するかを探る段階である。日本的な会議進行方法に対し，留学生の中には文化的差異を早くも感じるものもでてくる。

チューター開始：留学生と日本人学生との大学内活動が始まる。留学生に対する日本語学習支援，講義・宿題などへのサポートを行う。留学生には個人的な付き合いをする初めての日本人として強く印象に残る。人によっては，徐々に信頼関係が形成される。

留学生による語学教室：全学向けの留学生による語学教室が開かれる。この活動では留学生が言語を通して母国文化発信の機会となる。日本人学生は，大学教科でもある中国語，韓国語をネイティブの教師から学べることと大学授業での問題点を直接教えてもらえる利点がある。チュー

ターから支援を受けている留学生は言語学習面で援助することができ、双方にとっての「互恵関係」が生まれる。

料理講習会：留学生の母国文化紹介の一つである自国の料理を作る会が開かれる。この活動は大学祭での出店の準備ともなり、日本人学生は熱心に取り組む。この時期になると、かなり親密度が深まり、ホームステイをしたり、郊外に出かけたり大学内外と活動範囲が広がる。日本人学生には地域文化紹介の役割を自らかつて出る積極性が見られるようになる。相手文化を学び合う活動へと発展する。

Ⅲ 接触中期——協働的活動の実践を通して相互理解へ

シンポジウム企画運営会議：留学生会・異文化サークルが協働で行うシンポジウムがあり、毎年、テーマを決めてそれに向けてプログラムが組まれる。これまでに、食文化、伝統楽器、民族衣装、結婚式などが取り上げられた。各テーマの文化歴史的背景と意味についてプレゼンテーションを行い、その後の交流会では、地域の人たちと日本・留学生、大学関係者が交わりのときをもつ。この行事の特徴は、地域の人、地域の専門家などにも参加協力を呼びかけ、会場も地域の国際交流会館を使用するなど、地域に開かれた活動になっていることがあげられる。会議の進め方、議論のし方などに、留学生、日本人学生に葛藤場面が見られる。インタビューから葛藤が多く出されたのはこの場面である。

準備会：役割分担が細かく決められ、それに沿って準備を行う。準備の進捗状況を報告試合、調整することもある。この段階で、双方が仕事の進め方についての文化的差異を強く感じる。留学生にとっては、日本的な仕事の進め方を好意的にとるもの、否定的にとるものがでてくる。日本人学生の中には、留学生の態度に疑問や違和感をもつ者もでてくる。双方のグループリーダーが仲介役としての役割を果たすと同時に、顧問教師も相談にのったり、アドバイスをしたりと教育的援助をする。

シンポジウムの実践：大学関係者、地域の人たちも参加するシンポジウムが実施される。プレゼンテーションと交流会の二部方式で行っているが、親子連れの参加者は文化の学習、留学生との交流を高く評価している。準備から実行にいたるまで、地域の専門家や領事館、区役所との交渉など社会的実践をする学習の場でもある。この段階では、課題達成のためには、双方が力を出し合い、協力することの重要性を認め、相互理解のための対処方法を考えるようになることが観察される。

反省会とフィードバック：反省会として「打ち上げパーティー」と報告書による記録づくりがなされる。打ち上げは達成感を共有し、「仲間の絆」を確かめ合い、強めあうことになる。報告書では、感想、活動への提案、意見などが出され、フィードバックのための参考となっている。この記録を通し、双方が協働的活動の意義を確認し合うことになる。

IV 接触発展期 ― 活動の分化 ニーズ別自主活動

個人的ニーズによる自主的な活動が生まれてくる。自由な発想を具体化する積極性が見られ、一つの活動が次の活動を生み出す「足場づくり」になっていることが観察される。自主ゼミ、討論会 地域の人たちとのスポーツ大会など活動の分化がみられる。

以上、協働的活動の事例を見てきたが、協働的活動を可能にしていくためには、対等な関係から出発し、信頼関係を構築し、課題を達成していくこと、活動の連続性が双方にとっての意義あるものとなることが捉えられた。また、教育的助言者として活動を後方から支えている教師、地域の人たちの役割も大きい。

図1からわかるように、課題達成過程が異文化接触の深化の度合いを示しており、双方が深く影響を及ぼしあっていることが示されている。

次に、活動の参加者へのインタビューと報告書からの内容を整理・分類し、分析していく。

3-2 インタビュー内容の分析

活動の中心スタッフである日本人学生と留学生にインタビューを実施した。その内容は、異文化接触による葛藤場面、対処方法、相互理解に必要なこと、活動から学んだことについて、予めアンケートに記入してもらい、それをもとに面接調査を行った。

インタビュー対象者：留学生 8人（中国3名、韓国5名）

日本人学生 8人（異文化サークルスタッフ）

- ・分析方法：面接で得た資料をkj法により、関連項目を集めカテゴリーに分類
内容からカテゴリーに名をつけた。

- ・記録報告書の内容：具体的な事柄、心的状態などの記述箇所を内省資料として用いた。

葛藤では、日本人学生、留学生から30項目が出され、4カテゴリーに分離した。

対処方略では、日本人学生3項目、留学生6項目に分類した。

活動からの学びでは、8項目に分類した。

表1 葛藤

	留 学 生	日本人学生
コミュニケーション	言語表現の不明瞭さ・日本人は皆同じ意見・真意がつかめない・ディスカッションができない・異なる意見への不寛容・日本語能力不足への配慮がない	空気が読めない・真意が伝わりにくい・直接的表現・日本語理解の度がわからない
仕事のやり方	全てが細かすぎ・臨機応変さが無い・他の人への気配りが無い	緻密さの欠如・ルールを無視する・計画性がない
時間感覚	余裕がない・会議の時間が長い	時間を守らない・時間配分ができない・出足が遅い
対人関係	先輩、後輩の関係が理解できない・教師への尊敬の念が薄い・自己開示度が違う・お礼、挨拶が過剰	友人関係が過剰に親密、お礼の表現が不十分、年齢を無視した態度

表2 対処方略

留 学 生	日本人学生
・相手の意図を理解する努力 ・説明, 説得の努力 ・社会的ルールなどについての知識をもつ ・寛容性(文化の違いを認める)をもつ ・議論の進め方など予め相談する ・計画的に物事を運ぶ努力	・説明努力を行なう ・相手の意図をよく聞く ・異なる意見に対する寛容性をもつ

表3 学び

留 学 生	日本人学生
・言外の日本語への気づき, 学び ・日本語コミュニケーション能力向上	・発想の広がり ・交渉能力の向上, 工夫を行なう ・あきらめない気持ちをもつ
・相手文化の深さ, 文化的差異の学びがあった ・大学での勉強の仕方を学ぶ(留学生), 大学での学習への意欲(日本人学生) ・豊かな言語表現力 ・友人関係の構築 ・寛容な態度の育成	

上記の表1～3には、葛藤内容、対処方略、学びについてのそれぞれのカテゴリーと具体的な内容が示してある。葛藤(表1)に対しては、コミュニケーションと対人関係に関連した項目が多い。この活動のコミュニケーション活動として、会議、ディスカッション、プレゼンテーション、シンポジウム進行などのフォーマルな場面と飲み会、友達との会話などのインフォーマルな場面がある。物事の決定をしなければならないフォーマルな場面では、双方の文化的アイデンティティが現れ、時にはぶつかり合うこともある。葛藤内容が多いのも当然ともいえる。主に、仕事の進め方、会議の進行などに対する葛藤が多数提出された。意見の相違に対する意識の違い、日本語力への不安も双方に見られた。異なる意見が当たり前と感じる留学生と調和を大切にするために反対意見を控える日本人学生との間に葛藤がみられる。また、日本語力への不安は、留学生には自信のなさであり、日本人学生は留学生の理解の程度への判断が難しく、「はい、わかりました」の真の意味が理解できないという。

時間感覚では、日本人学生からは時間を守らないこと、留学生からは時間の使い方がルーズとすることが挙げられた。

課題遂行のためには、これらの葛藤を乗り越える対処方略(表2)を双方が考えていかなければならない。相手を尊重し、理解する努力、相手にわかるような説明、よく聞く努力、ルールを守るなどが挙げられた。相手への配慮が双方に信頼関係を強めることになる。

活動からの学び(表3)では、双方に共通した事柄では、コミュニケーションの大切さ、文化的差異、相手文化を尊重する態度、寛容さ、協働による課題達成感、豊かな表現力が挙げられた。留学生個別の内容では、仕事の進め方、綿密な計画性、役割と責任感、工夫の仕方、大学での勉

強の仕方、言葉遣いなどが挙げられ、日本人学生からは、発想の広がり、忍耐力（あきらめない気持ち）、交渉能力、豊かな表現力などが挙げられた。双方にとっての「学び」とは、協働的活動を通じた相互作用の経験から得たもので、**接触の相乗効果**と捉えることができるであろう。

3-3 報告書から葛藤、対処方略、相互理解（学び）の記述抜粋

ここで用いた記述記録は、異文化サークルと留学生会が毎年発行している活動報告書である。両資料には、各活動についての記録及び感想が書かれている。個人的な内省資料として、葛藤、対処方略、相互理解についての記述箇所を分析し検討する。

資料1 葛藤場面から対処、理解へ「10月祭について」日本人学生の記述

「留学生との交流は、かならずしも成功とはいえないだろう。留学生のk君の家で何度か料理の練習と称して皆で料理を試作してみたのであるが、思えばあの時が一番楽しかった。私達は事前の練習などから料金の目安、量、材料などを測ろうと考えていた。だが、留学生の頭には、既に決まっていたのである。前日の買い物で我々のプランが否定されたときには、ここにきてそれかよと腹が立った。だが、いま思い返してみれば、私達の行動も自分勝手であったように思える。留学生たちの意見を真剣に聞いて回っただろうか。どうせ聞いても返事が返ってこない和高をくくり、勝手に決めていただけなのではないだろうか。

正直、留学生の出足は遅い。でもそれは私達の感覚からすればである。そこを踏まえて行動すべきであったと思う。今回の十月祭は留学生との付き合いを考えるうえで、大きな意義をもったものであった。」

資料2 対処方略「一年の活動を振り返って」日本人学生の記述

「最初のころは何事にも受身で、留学生たちに合わせようという姿勢でしたが、交流の機会が増えていくうちに、合わせるのではなく自分の文化で接し、それを伝えていこうという姿勢に変わっていきました。そこには既に受身と言う姿勢は見られませんでした。自ら異文化を学び、自分の文化と比較し見直す。そして留学生に自然と伝えていこうという姿勢です。」

資料3 活動からの学び「一年の活動を振り返って」留学生の記述

「会長として初めての大きな行事が伝統楽器シンポジウムであった。日本人学生との準備会で、意見がまとまらなく時間ばかりたってイライラした。日本人学生は皆と違う意見をいうのをためらうようだ。韓国では、はじめから一人一人意見が違うと思っているので、たとえ自分と違う意見をいっても気にしない。日本人学生から学んだことは、何事にも綿密に計画を立てることだ。最初は、細かすぎる気がして自由度が少ないと思ったが、後になるとそのほうが仕事に無駄がないことがわかった。また、責任感が強い。決められた役割はきちんと果たすので信頼

できる。私は異文化サークルの人と交流して、留学生が「ゲスト」ではなく、同じグループの一員だと言う意識に変わってきた」

資料4 活動からの「学び」「1年の活動報告から」日本人学生の記述

「日本人はよく“和”を大切にするとわれ、自分の考えをストレートには言わずに周りに合わせる事が美徳のように言われてきました。それに対し、中国や韓国の人たちは自分の考えを素直に口にします。これは一見冷たく映ることもあります。しかし、事実はその逆なのではないか、とそう考えさせられたとき“和”とは一体何のか、本来“和”とはどうあるべきなのかと改めて問われた気分でした。この行事を通してでた結論は、周りに合わせるのではなく、周りの考えを理解しその上で自分の考えを伝えることが国際交流を行う上での大切な“和”となっていくのではないのでしょうか。」

記述内容にある葛藤については、同じ事象に対して日本人学生と留学生、双方の捉えかたの違いが見られた。その背景には、自文化のやり方、自文化価値観で物事を判断していたことによるものが多かった。ベリーによる異文化接触の初期段階に見られる葛藤と同じ結果を得た。仕事の運び方、留学生の意見の出し方が自己主張ととられることもあった。

次に対処方略としては、相手の意図を十分理解できなかったことに対しては、もっと聞く耳をもつべきだったという。また、相手文化を理解した上で、自文化のやり方で接するべきだと言う対処方略を考えた学生もいる。受け身ではなく自文化発信をする努力、説明をする努力、話し合うことの大切さがわかったという報告も見られた。

「学び」に関しては、異文化の人との付き合い方、相手への配慮と理解する努力など山岸(1995)が提唱する異文化間対処能力^(註3)が育成されたことがうかがわれる。

4 調査IIの結果及び考察

本章では、日本人学生と留学生を対象に行った質問紙調査の結果を研究目的、調査Iと関連した項目について比較検討する。

調査票の「大学の教育・学習場面における行動、態度」に関する項目(調査票Ⅲ-1~14)について、留学生(異文化交流活動「有り」群、および「ない」群)、日本人学生、活動のリーダー(留学生、日本人学生)の5種に分けて、クロス集計を行った。それぞれの群の平均値が表4に示してある。

表4 留学生・日本人学生の交流活動の有無別による行動得点の平均値

実際行動に関する項目	留学生 活動無 27人	留学生 活動有 48人	日学生 135人	リーダー 日8人	リーダー 留8人
1 教師に具体的な内容の指導を受けている	2.640	3.250	1.918	1.875	3.143
2 周りの人達との対立回避に努めている	2.920	3.083	2.545	2.625	3.429
3 自分のことより友人や所属グループを優先する	3.160	3.271	2.799	3.125	2.286
4 親睦会などに積極的に参加している	2.760	3.208	1.948	4.750	2.571
5 教師や友人に「言葉」ではっきり伝える	3.520	3.500	2.485	3.000	3.286
6 課題は教師の指示通りに進める	2.760	3.063	2.358	3.000	3.000
7 教師と意見が異なる時説明、反論する	2.640	2.750	1.699	2.375	2.286
8 教師を知識、専門性において尊敬する	3.240	3.521	2.604	3.625	2.857
9 教師に対し従順な態度で接している	3.520	3.354	3.083	4.000	2.571
10 環境、福祉問題に関心を持って行動する	2.840	2.938	2.858	3.000	2.286
11 規則、契約等は確認し、生活する	3.600	3.604	2.910	3.375	3.000
12 金銭や物質を第一と考え生活する	2.600	2.417	2.134	2.500	2.286
13 成績向上、出世を付き合いに優先する	1.500	1.750	1.477	1.375	1.143
14 優秀な学生だと評価されるよう頑張る	3.455	3.208	2.194	3.250	3.429

（5件法による回答 1まったくしていない～5完全にしている。各項目の得点の平均値を表にまとめた）

調査結果から注目すべき点として次の5点を挙げたい。

- 1) まず、項目1の「教師から具体的な指導を受けている」では、留学生と日本人学生とに大きな差が見られた。最も高いポイントを示したのは、留学生の異文化交流有群であった。留学生は教師からの細やかな指導を必要としていることがわかる。一方、日本人学生と日本人リーダーの平均値が低いのは、学習面で教師の指導を必要としないか、あるいは「自律性」の高まりとも考えられる。しかし、日本人学生の受身的な学習スタイルを考えると、彼らに対しても積極的に指導やアドバイスを受けるよう教師が働きかけることも時には必要かもしれない。
- 2) 対人関係構築に関する項目2では、日本人学生より留学生のほうが直接対立を避けるようにしていることが示された。留学生のうち、リーダーが最も高いポイントである。これは、活動を推進していくには仲間との調和が必要になり、前章で述べたように、彼らが経験から学んだ対処方略の一つではないかと考えられる。
- 3) 「自分を犠牲にしても友人、所属グループを優先する」（項目3）という集団主義を示す項目では、日・留学生ともに3ポイント前後であり、集団主義志向の傾向がやや見られる。特に、留学生の接触交流あり群は、最も高い平均値となっており、日本人との交流の影響なのか、留学生の行動や態度にむしろ集団主義志向が見られるという結果が出ている。
- 4) コミュニケーションに関する項目では、「教師や友人に言葉で明確に伝える」（項目5）と

いうのに対し、留学生と活動のリーダーの両群の平均値が高くなっている。調査Ⅰでも示されたが、留学生は「言葉で明確に伝える」文化、教育を受け継いでおり、日本人学生との差異が現れている。ただ、日本人リーダーについては、協働活動の成果からか、一般の日本人学生よりもポイントが高くなっている。

- 5) 大学の勉学環境への適応、順応に関する項目として「優秀な学生だと評価されるよう頑張る」(項目14)、「課題は(自分の考えより)教師の指示通りで進める」(項目6)や「教師を専門性、知識において尊敬する」(項目8)があるが、いずれも、日本人学生よりも留学生と日・留学生の活動リーダーの方のポイントが高い。特に、優秀な学生としての存在感を示したい、専門家としての教師を尊敬するという行動が留学生群と活動リーダーを経験した日本人、留学生群に見られたことは、注目に値する。

5 まとめと今後の課題

本研究では、日本人学生と留学生が行った協働的活動の内容の分析、活動の中心的実践者の内省資料と面接、さらに、日本人大学生・留学生に対して大学の場面でどのような行動をとっているかについて調査を行った。異文化接触場面として協働的活動をとりあげた理由には、日本人学生・留学生が共通の目標に向かって課題を達成するという一連の活動で、対人関係の構築、コミュニケーション方略、言語の問題などこれまでの異文化接触研究で問題とされてきた事柄を経験する事になるからである。箕浦のいう認知、行動、情動に至るまで、日本人学生、留学生の心的変容を詳細に捉えることができた。

活動経験者のうち、特に活動の中核にいるもの同士の諸レベルにおける相互作用から捉えられた葛藤内容では、具体的な事柄に対する意味の捉え方(認知)、そのことへの感情表出(情動)が見られた(資料1)。しかし、実践者達には課題を達成しようという共通目標があるため、葛藤解決へ向けて対処方略を考えなければならない(資料1, 2)。どうすれば相手を理解できるのかという相互理解への努力が課題達成を可能にするからである。

面接、記述資料からの結果が示したように、達成感を共有することで双方が信頼関係を強めていく。この点に協働的活動の持つ意義があるといえるであろう。この活動が、自己変革のきっかけになったことが内省資料から得られた(資料2)。すなわち、この活動のもたらす意味は、「学び」として各自が認識したものであり(資料3, 4)、それには諸要因の相互連関性が考えられるが、課題達成という共通目標に向かう過程で双方に相乗効果となって現れたものと言えるのではないだろうか。

相互に影響を及ぼす協働的活動を可能にするには条件があり、その条件を満たすことが成功、不成功の鍵となると考えられる。図1の活動のプロセスに示したように活動の中核となる日本人学生と留学生が**対等な関係**からスタートしたことが活動を推進する上で重要になる。日本人・留学生の関係は、互いに自立していながら相互協力、相互扶助を具体的な形で活動の中に生み出し

ていく。

次に、活動への助言者、協力者としての教職員、地域の人たちの役割も課題達成には不可欠である。顧問教師、地域の専門家はそれぞれの専門的知識を提供し、活動を豊にするリソースとなっている。例えば、伝統楽器シンポジウムでの琴演奏会、伝統衣装シンポジウムでの領事館の協力、茶道部との連携によるお茶会の開催、自治体からの援助による会場使用など地域の専門家、教員たちのリソースを取り込んでいる。このことは活動に多元的な価値を持ち込むことになり、一つの活動から次の活動を生み出す足場づくりとなっていることが示された。

また、学生同士、教員、地域の人たちとの**対人関係形成**を経験することは成人期の発達過程に在る学生にとっては自己成長をもたらすものとなる。協働的活動の経験は、コミュニケーション能力の育成、対人関係形成にポジティブな影響を与えるものである。調査Ⅱの結果でも示されたように、協働的活動のリーダーたちが教師や友人との関係、言葉による明確なコミュニケーションスタイルに高いポイントを示していることから明らかである。

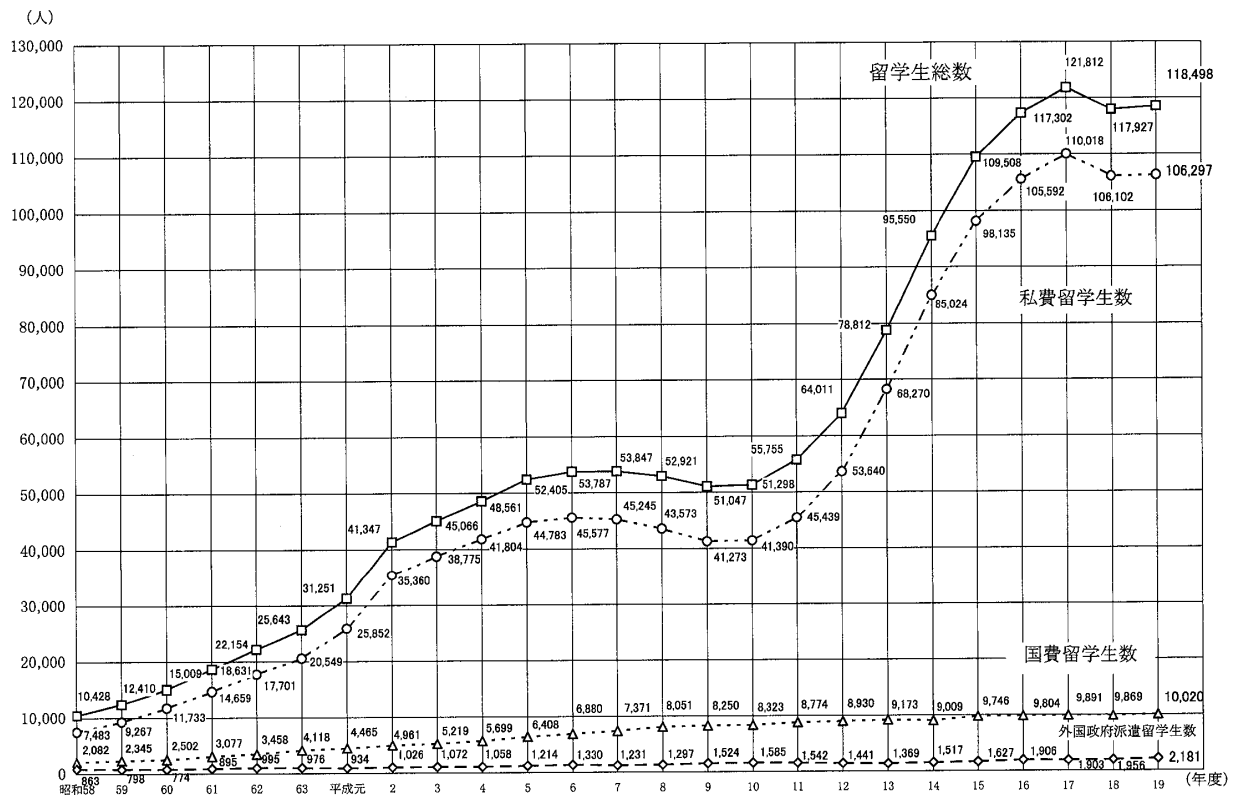
この一連の活動で日本人学生と留学生とが徐々に形成した**信頼関係**は、活動をより高次の活動へとつなげていく**活動の連鎖**を可能にする原動力になっていることが捉えられた。このことは、本研究で探求した**双方向的効果**といえるであろう。

留学生、日本人学生の異文化接触研究には、事例を取り上げ、具体的な事柄を観察分析することが今後一層求められる。それと同時に、多様な要因の相互連関性を捉えるためには、接触の様々なタイプを取り上げ、その場面特有の変数の多様性にも着目し、分析をしていく必要性があろう。

留学生交流が日本社会にとって貴重なリソースとなり、新たな価値を生み出すものとなるためにも今後もこの研究を多面的な角度から行っていきたい。

注

注1 平成19年度，外国人留学生の日本留学状況 [日本学生支援機構のデータより]



注2 ホフステード (Hofstede 1980) は、40 カ国の IBM 社員を対象に価値観に関する調査を行った。因子分析の結果、文化に関連する 4 つの価値次元に分類した。権力格差，個人主義・集団主義，男性らしさ・女性らしさ，不確実性の回避を文化的相違を説明する概念として用いた。

注3 山岸 (1995) は異文化間能力を統合的な能力として，コミュニケーションスキルより深いレベルで捉えるべきだと述べている。自文化と異なる文化一般に対する対処の仕方を助ける能力と捉えている。異文化対処能力として，文化的気づき，自己調整能力，状況調整能力に分けている。

引用・参考文献

- 加賀美常美代 (2007) 『多文化社会の葛藤解決と教育価値観』ナカニシヤ出版
- 加賀美常美代 (2004) 「教育価値観の異文化間比較：日本人教師，中国人学生，韓国人学生，日本人学生との違い」『異文化間教育 19』
- 加賀美常美代 (1997) 「日本語教育場面における異文化間コンフリクトの原因帰属・日語教師とアジア系留学生の認知差」『異文化間教育 11』アカデミア出版会
- 谷口弘一・福岡欣治 (2006) 『対人関係と適応の心理学』北大路書房
- 関 道子 (2003) 「外国人留学生と日本人受け入れ側の異文化接触による相互の意識変容に関する縦断的研究」平成10年度～平成13年度科学研究費補助金研究課題番号 0680301
- 神谷順子 (2003) 「留学生と日本人大学院生の大学生活への適応」p 15～p 43 「日本人大学院生と留学生

- との接触交流」p 88～p 95 研究課題番号 0680301 成果報告書 研究代表者 関 道子
神谷順子・中川かず子（2002）「日本人大学生の異文化接触に関する研究—留学生との接触経験による意識変容について」『北海学園大学学園論集第 111 号』
- 水野治久（2003）『留学生の被援助志向性に関する心理学的研究』風間書房
- 渡辺文夫（2002）『異文化と関わる心理学』サイエンス社
- 佐藤郡衛（2001）『国際理解教育』明石書店
- 田中共子（2000）『留学生のソーシャルサポート・ネットワークとソーシャルスキル』ナカニシヤ書店
- 中川かず子・神谷順子（2000）「大学生の教育・生活に関する態度と価値観並びに大学教育に対する適応」『北海学園大学学園論集 第 106 号』
- R Brislin (2000) *Understanding Culture's Influence on Behavior*, Harcourt College Publishers
- 箕浦康子（1999）『フィールドワークの技法と実践 マイクロエスノグラフィー入門』ミネルバ書房
- 箕浦康子（1998）『日本人学生と留学生：相互作用のためのアクションリサーチ』科学研究費研究報告書
- 箕浦康子（1996）『文化のなかの子ども』東京大学出版会
- 岩男寿美子・萩原滋（1988）『日本で学ぶ留学生——社会心理学的分析——』劉草書房
- 岩男寿美子・萩原滋（1997）「在日留学生の対日イメージ」[13]『慶応義塾大学新聞研究所年報』
- 倉地暁美（1998）『多文化共生の教育』劉草書房
- 横田雅弘（1998）「留学生と日本人学生の異文化間教育」『現代のエスプリ 377』至文堂
- 横田雅弘（1991）「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育 5』アカデミア出版会
- 木村真理子（1997）『文化変容ストレスとソーシャルサポート』東海大学出版会年報
- 渡辺文夫（1995）『異文化接触の心理学』川島書店
- 山岸みどり（1995）「異文化間能力とその育成」渡辺文夫〔編著〕『異文化接触の心理学』川島書店
- ホフステード（1995 初版）『多文化世界』（岩井紀子・岩井八郎訳）有斐閣
- Triandis H. C (1995) *Indivisualism and Collectivism Boulder CO; Westview Press*
- トリアンディス（2002）『個人主義と集団主義——二つのレンズを通して読み解く文化』北大路書房
- 斎藤耕二（1993）「アカルチュレーションの心理学」中西晃（編）『国際教育論』創友社
- Berry, J.W., Poortinga, Y.H., Segall, M.H. & Dasen, P.R., (1992) *Cross-Cultural Psychology*, Cambridge University Press
- 上原麻子（1992）「外国人留学生の日本語上達と適応に関する基礎的研究」平成 2 年度文部省科学研究報告書
- 星野 命（1992）『クロスカルチャー思考への招待』読売科学選書
- 江渕一公（1991）「在日留学生と異文化間教育」『異文化間教育 5』アカデミア出版会